
太陽のはなびら

伊織千景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽のはなびら

【Nコード】

N6728K

【作者名】

伊織千景

【あらすじ】

【一か月集中連載】ゆつくりと、しかし確実に滅びゆく世界で、一人の少年は生きていた。滅びゆく世界の中でも、懸命に生きているロコロ村の人々とともに。しかし、少年は一つの重大な秘密を持っていた。少年は背負っていた。人には言えない。言えるはずのない、大きな十字架を……。だれしもがもつ、人には言えない悩みや秘密。どんなに親しくても、親しくなればなるほど言えない秘密。それをこころに抱えている全ての人に、この話を捧げます。COMITIA92で配布予定の小説を、クライマックス直前まで公開し

ます！ ラストが気になる方は5月4日のCOMITIA92で、
「眠法入門」スペースへどうぞ！ ↓5月4日ありがとうございます
した！ ラストまで更新します！

プロローグ

雪が降っていた。

夜空の月の光が、深い森に積もった雪を青白く照らす。森の中に、こぢんまりとした赤レンガ造りの家がある。家の中には、少女と老人の二人きり。二人は降り積もる雪を眺めていた。

「だいぶん積もりそうだな。雪かきが大変そうだ」

いすに腰掛けている老人は、ぼつりとつぶやく。老人の髪と髭は見事なまでに白い。

顔にはしわが深く刻まれている。それはまるで、彼の過ごしてきた月日を表す年輪の様だった。

「リュヴリュ、薪をくべてくれないか。少し寒くなってきた」

老人が、暖炉の前に座っている少女に声をかけた。

リュヴリュと呼ばれた少女は、うなずいて、薪を暖炉に放り込んだ。リュヴリュはクリーム色で、長い耳あてと赤いリボンが付いた、少し大きめのキヤスケット帽子をかぶっている。帽子の下にのぞく、肩のあたりまである鮮やかな栗色の髪が、暖炉の炎で艶やかに光る。その隙間から深い藍色の瞳が、暖炉の炎を映していた。グラデーシヨンのかかった、赤いひらひらのワンピースの上に着たピンクのボンチョに、リュヴリュはまるで亀のように首を縮こませる。暖炉が暖かさを、部屋にもたらすのを、彼女はじっと待った。しばらくして、暖炉の中の火が強くなり、暖かい空気が部屋を包み込んだ。

「暖かい」

リュヴリュは暖かさを噛みしめるかのように、はにかみながらつぶやいた。

彼女は暖炉が好きだった。こんな寒い日はよく、暖炉の前で長い時間を過ごす。暖炉のぬくもりは、体だけではなく、心も温かくしてくれる。老人はその幸せそうな顔を、いとおしそうに眺めた。しか

し、その優しげな微笑みが、一瞬歪み、大きくせきこんだ。リュヴリュは飛び起き、老人の座っているいすの元に駆けつける。その顔には、強い不安の色がにじんでいた。

「ああ、心配させて悪い。ちよつと痰がのどに絡んだだけだ」

老人は落ち着いた声で話した。しかし、老人の顔色は、ただ、痰が絡んだだけというにはあまりに青白かった。

リュヴリュは台所に向かい、コップ一杯の水と、何かの錠剤を持ってきた。

「いや、それはもういいんだ。ありがとう」

老人は穏やかな笑みを浮かべ、静かにそういった。

「おまえがここにきてから十年か。早いものだ」

老人は窓の外を見つめながらつぶやく。

「おまえに出会ったばかりの頃、私は死にとりつかれていた。死が恐ろしくて、それを克服しようとした。この薬も、そのために作ったのだ。だか、もういい。もういいんだ」

ぽつり、ぽつりと老人は話し続ける。

「不思議なものだ。あれほど恐れていた死が、こんなにもいとおしいものだったとは」

老人は、不思議そうな顔をしたリュヴリュを見つめる。

「世界は、人生は、終わりがあから鮮明に輝くのだ。永遠に輝くものは、輝く意味を失う。いつか朽ち果てるからこそ、それは美しく。そしていつか消えてしまうからこそ、それを慈しむのだ」

リュヴリュは頭を傾げ、よくわからないという表情をする。

そんなリュヴリュの頭を、老人は優しくなでる。

「大丈夫。お前もいつか、この意味がわかる日が来るよ」

老人はゆっくりとした動作で、いすから立ち上がり、壁に掛けられているコートを羽織って帽子をかぶった。

リュヴリュはなぜ老人が、こんなに雪が降っているのに、外に出ようとしているのかが分からなかった。それを聞こうとしたが、心地よい睡魔がリュヴリュの意識を削ぐ。暖かい暖炉のせいだろうか。

それとも先ほど食べたおいしい晩御飯のせいだろうか。

リュヴリユはその睡魔の理由をわからないまま、完全に眠りについた。

老人は、リュヴリユの寝息を聞いた後、彼女をかつぎ上げ、ベッドに寝かせ、毛布を上には掛けた。

「食事にまぜた薬。ちゃんと効いているようだ。本当は、ちゃんと別れを告げたかったが、ごめんな。きつとお前に止められたら、私は逝けなくなる」

老人は、深い眠りにについているリュヴリユの頬をなでた。くすぐったそうな、うれしそうな寝顔を、老人はしばらく眺め。そしてドアに手をかけた。

「それじゃあ、お別れだ。今までありがとう、リュヴリユ」

ドアは閉まり。老人は深い雪の中に消えていった。

なにも知らないリュヴリユは、ただ、幸せそうに、眠っていた。

第一章：暖かな村

気の遠くなるような年月が経ち、栄華を極めた世界は、滅ぼうとしていた。

それはまるで、大きくなりすぎた大木が、その身を支えられなくなつて、

生きながら朽ちていくような、ゆっくりとした、しかし着実な滅びであつた。

極端に高度化した過去の技術は、

それを扱える専門家が過去の戦争でほとんどが死に絶えた為に、知識を持つ、一握りの人間以外は扱えない物となつてしまった。

人は、かつての高度文明社会を維持することはできなくなり、

結果、小さな集落をいくつも作り上げ、身を寄せあうかのようにして、

かろうじて生きながらえていた。

そんな世界に転々としている集落の一つ、

深い森により沿う様にあるロコロ村に、今日もまた太陽が昇つてきた。

朗らかな暖かさと、色めき立つ青々しい草々。

虫たちは生き生きと短い生を謳歌している。

厳しい冬が終わり、待ち望んだ春が訪れたのだ。

ロコロ村の規模はさほど大きくない。しかし、周りに大きな集落があるために、商人が多く出入りする

集落であつた。商人を相手に宿や食料を提供することで、なんとかロコロ村は生き延びてきたのだ。

村人は人なつっこく友好的な人物が多い。

特に村長は、客人をもてなすことの好きな気さくな人物で、村の外問わず人気があつた。

ロコロ村の人達は、滅びゆく世界に絶望して自暴自棄になることもなく、斜に構えて皮肉を口にすることもなく、迫りくる世界の終わりのなか、

愛する人のため、

守りたい家族のため、

心を許せる仲間のために、

その日その日を精一杯生き続けていた。

暖かな村（2）

そんな村の、ある一角にある小さな小屋に、一羽の大きなタカが舞い降りた。

淡褐色の体に、白く短い尾羽、黄色い嘴。翼を開けば、一般的な大人の男性ほどの大きさ。

この種類のタカは、ある民族では、「鳥の神」と呼ばれている。確かに、その容貌は、見る者に畏怖の念すら抱かすほどだ。

その大きなタカは、首に一つの袋を提げていた。

その袋を、タカは器用な動作で、小屋の屋根の縁にあるフックに引っかける。

そして、屋根をくちばしで数回つついた。

すると、しばらくして、小屋の中から一人の少年が出てきた。

麻でできたゆつたりした白のシャツと、木綿でできた緑のズボンを少年は着ている。

それがあたりの人々が寝間着としてきている服であることと、

耳のあたりまで伸びた黒い髪が、少しはねているところを見ると、

少年がまだ起きて間もないことがわかる。

少年は眠そうに目をこすってタカをみる。

その顔には、青年に移り変わる、幼さの中に芽生えつつある精悍さが表れていた。

タカは少年を見ると、甲高い鳴き声を出した。

「おはようヒューイ。おつかいごろうさん」

少年はフックに掛けられた袋を手に取り、中身を確認した。

中には一冊の医学書が入っていた。

「重かつたろう。ご褒美あげるからこっちへおいで」

少年は右腕を地面と水平に伸ばした。

ヒューイと呼ばれたタカは、ゆっくりと羽ばたき、少年の腕にとまる。

少年が腕を曲げると、タカは少年の肩に移動した。

少年がポケットから一本のソーセージをヒューイの口元に持っていく。

ヒューイはそれをくちばしでつかみ、あっという間に平らげた。

そして、また甲高い鳴き声をあげた。どうやら喜んでいようだ。

少年は袋の中の本を手取る。

本の表紙には、「響覚者という存在についての研究」と書かれている。

しばらく、少年はその本の表紙を眺め、ヒューイを肩に載せたまま、小屋に戻った。

暖かな村（3）

少年の住む小屋は、生活ができる最低限のものしかなかった。

あまりに質素。もし、今すぐそこから追い出されても何の不都合の無いような部屋だった。

少年はヒューイを鞆掛けに乗せ、本をテーブルの上に載せる。途中だった朝食を済ませ、身支度を整えた。

そろそろ子供たちに稽古をつける時間だ。壁に掛けてある櫓の木で作られた剣を取り、それ専用の袋の中に入れ、肩に担ぐ。時計を見た。今から出れば、稽古の時間にちょうど間に合う。家を出ようとドアノブに手を掛けたとき、けたたましいノックの音が聞こえた。

「シン、起きてる？」

「ピリカさんですか？ 起きていますよ。今出ます」

シンと呼ばれた少年はドアを開いた。

ドアの前には、一人の少女が立っていた。その少女は、絹の様なつやのある黒い髪の毛を腰辺りまで伸ばし、幾何学的な柄のバンダナを頭に巻いている。落ち着いた雰囲気から、少年より少し年上であることがわかる。整った顔立ちの、美しい少女だった。

「シン、今日は何か予定ある？」

ピリカと呼ばれた少女は尋ねる。

「今から朝稽古ですよ」

シンがそう答えると、ピリカは呆れた様な顔をして、ため息をついた。

「何もこんな日まで稽古なんてつけなくていいのに」

「いえ、僕が役に立てることならやらせてもらいたいです。村の人にはいろいろとお世話になっているので」

「ああ、そんなにかしこまらなくていいのよ。もうあなたは村の一

員なんだから」

少女は屈託の無い笑顔で笑う。

「それにしてもシン。今日が何の日か覚えてないの？」

「何かありましたっけ？」

少女は少し悩んだ後、何か小さい子供が悪戯を思いついたような含み笑いをして、シンの手を取った。

「今日は稽古ナシナシ。その代わり、ちょっと付き合って」

「え、でも」

「いいのよいいのよ。皆は事情を知っているから」

「いいんですか？ 村長さんに怒られますよ？」

「お父さんも解っているから大丈夫よ。それとも、私に付き合うのは嫌？」

シンがそんなことないと首を振ると、ピリカは満足そうに満面の笑みを浮かべた。

「決まりね。それじゃ、行こう」

暖かな村（４）

ピリカに手を引かれて、シンは村の中心にある広場にやってきた。広場は、外からやってきた、多くの商人たちが出店を開いている市場の様な場所だ。

普段でも活気のある場所だが、今日はいつにもました盛況ぶりだ。

「なんだか盛り上がっていますね。何かあるんですか？」

ピリカは少し不思議そうな顔をして、ああ、と声をあげた。

「そっか、シンはまだここにきて一年たつてないものね。今日はね、年に一度の村の祭りなの。だからこうやってたくさんのお店が回るのよ」

周りを見ると、シンが稽古をつけている子供たちがはしゃぎまわっていた。

そのうちの一人が、シンとピリカの方に向けよってきた。

「ピリカねーちゃん積極的ー！ ２人ともラブラブだなー！」

「ばっ、ばかヨハン！ そんなんじゃないわよっ」

ピリカは顔をまるで沸騰したやかんの様に赤くして、ヨハンと呼ばれた少年を怒鳴りつけた。ヨハンにはやにや笑いながら、素早く人混みの中に消えていった。

「ご、ごめんね弟が変なこと言って。気を悪くしたらごめんね」

今にも湯気がでそうな顔をかくしながら、ピリカは必死に弁解する。そんなピリカを見て、シンは柔らかなほほえみを浮かべて、彼女の手を差し出した。

「お祭りの日は、大切な人と楽しむものと両親から教えてもらいました。よかったら、僕と今日一日、一緒に過ごしてくれませんか？」

ピリカは一瞬目を見開き、その後、赤い顔を見せないよううつむいた。そして無言でうなずき、シンの手を取った。

第二章：限られた時間の幸せ

シンとヒューイがロコロ村に来たのは、去年の春だった。

生き倒れになりかけていたシンとヒューイを、ピリカが見つけた。村に連れてかえたのだ。

普通の村では、よそ者を村に入れることをあまり良く思わない。

疫病を運んできたり、厄介事を持ち込んできたりすることが多いというのがその理由だ。

今までシンは、様々なところを転々としていた。無視されることは日常茶飯事。

門前払いを受けたりした事も少なくない。

酷いところでは、威嚇なしでいきなり攻撃された事もあった。

しかし、ロコロ村は違った。

村人達は、シンが空腹なのを知ると、家から食べ物を持ってきて食べさせた。

ヒューイには、皆で彼が好みそうなものを考え、一通り揃えて与えた。

宿を探しているとシンが言うと、ピリカの父である村長が自分の家に来るよう申し出た。

流石にシンは、そこまでしてもらっては申し訳ないと断ったが、村長はそのかわりとして、シンに一件の小屋を分け与えた。

この村の人々は、他の村の人々と違い、シンを拒絶しなかった。

村人たちの好意が、そして善意が、シンの心に、久しぶりのぬくもりを与えた。

そして、シンはこの人たちに、何かお返しをしたいと思うようになった。

小さな子どもに武道を教えたり、農作業を手伝ったり、自分のでき

ることは何でもしてきた。

それが、少しでも恩返しになればと切に思いながら。

この一年間。シンは本当に幸せだった。

それがずっと続けばとも思った。

しかし、シンはもうすぐここを離れなければいけない。

村人たちが大好きだからこそ。シンは村を去らなければいけない理由があった。

その理由は。その忌まわしい理由は。

「……うしたの？ シン？」

ピリカが心配そうな顔をして、シンの顔を覗き込んでいた。

「どうしたの？ ぼうつとして」

「あ、いや、何でもないです」

シンはあわてて取り繕った。

「なにか悩みでもあるの？ お姉さんが相談に乗ってあげようか？」

「いや、その、ただちよつと、今晚の献立を考えていて」

苦しい言い訳だと自分でも思ったが、ピリカはそれ以上追及しなかった。

逆にそれが、シンにとって、とてもありがたかった。

限られた時間の幸せ（２）

「シンは何か気になるものがある？」

ピリカはシンに尋ねた。シンは改めて周りを見渡してみる。

食べ物、本、骨董、生活用品、実に様々なものが売られている。

その中で、シンは骨董を扱っている出店で、奇妙なものを見つけた。それは、ヘアバンドの両端に、球体を半分にしたようなものがついたもので、耳あての様だった。

シンが不思議そうにそれを見てみると、座っていた商人が話しかけてきた。

「兄ちゃん、これが気になるたあ、お目が高いねえ。面白い形をしているだろう。これはな、古代の遺跡で発掘された古代の道具、通称アーティファクトの一種でね。>ヘッドフォンくちゅうんだ。昔はこれを頭につけて音を聞いていたっていう話さ」

「音を、聞く？」

「そうなんだ。昔はこれをほかのアーティファクトにつなぐといろんな音が聞こえていたらしいよ。どうだい？　ここはひとつ買ってみないかい？　今なら特別！　五百カンで売ってあげるよ？」

商人はシンにたたみかけるように話しかける。

五百カンは、シンの一か月の収入の三分の一に匹敵する金額だ。とても安いとはいえない。

しかし、シンは商人の話術に圧倒され、商人のペースにのまれてしまっていた。

下手をしたらそのまま買わされてしまうかもしれない。

そんな状況を、ピリカの一言がひっくり返した。

「それは今も使えるんですか？」

「そ、そりゃあ、アーティファクトにつながれば使えるはずさ」

商人が刹那、わずかに見せた動揺を、ピリカは逃さずとらえる。

「へえ、それじゃあちよつと使ってみてもいいですか？」

「え、ええと、ちよつとウチで扱っているアーティファクトはこれに対応していなくて」

「要は、壊れているって事ですね。さ、シン。別の店に行きましょう」

ピリカはシンの手を引いて店から離れようとした。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！ 二百カンでどうだ？」

「シン、あっちにいい帽子があつたのよ」

「そ、それじゃあ百カン！ 百カンでどうだ！」

ピリカは振り向き、天使の様な笑みで、商人に笑いかけ、一言。

「五十カン」

商人は、悪魔を見るような目で、泣きそうになりながら、五十カンを受け取った。

限られた時間の幸せ（3）

「ずいぶんと値切りましたね。最初の値段の十分の一だ」

シンは肩を落としている商人を、少し気の毒に思いながら、ヘッドフォンを手に持って先を歩くピリカに言った。

「本当はもうちょっと値切ってもよかったのだけれど、それじゃああんまりにかわいそうだからね。五十カンで勘弁してあげたの。それに皆からカンパも貰ってたからね」

屈託のない笑顔を浮かべるピリカを見て、

シンは改めてピリカが持ったたかな強さを確認させられたような気がした。

この人は敵に回したくないな。心底そう思った。

「それで、そのヘッドフォンっていうの、どうするんですか？ それにカンパって？」

ピリカは突然振り返り、ヘッドフォンをシンの首にかけた。驚くシンに、ピリカは包み込むような声で言った。

「シン、お誕生日おめでとう」

何が起こったのか、何を言われたのか、思考が追いつかなくてシンはしばらく固まった。

不意に、両手に心地よい温もりを感じた。ピリカが手を握っていてくれた。

「あなたはいつも頑張ってくれている。でも、たまには甘えてくれているの。皆あなたのことが好きなんだから、遠慮なんてしちゃダメよ」

シンは、ピリカの、村人たちの優しさがうれしくて、

でも、もう長くはここに居る事が出来ないという事が悲しくて、胸の奥が、まるで締め付けられるよう痛むのを、じっと堪えた。

第三章：響く心

日が少し落ちて、あたりは夕焼け色に染まってきた。

市場は少しずつ落ち着いてきて、なんだか少し、さみしさを感じた。シンは自分の首に掛けられている、ヘッドフォンに触れる。

他人からプレゼントをもらったのは、実は初めてかもしれない。これは、どんな事があっても大切にしていこう。

例え、この村を離れるとしても。シンは心の中でそう誓った。さて、そろそろ家に帰ろう。そうピリカに伝えようとした時。

一人の男の怒声が、市場の中央のあたりから聞こえた。

「このクソガキっ！ お前のせいで商品が台無しじゃねえか！」

「違うよ！ 俺じゃない、俺は何もやってないよ！」

シンとピリカは、その声が聞こえる人だかりの中に入り込んだ。

そこには、先ほどヘッドフォンを売っていた商人が、一人の少年を責め立てていた。

商人の手には、壊れたアーティファクトが握られている。

シンとピリカは目を見開いた。

責められているのは、先程祭りで会った。ピリカの弟、ヨハンだったからだ。

響く心（2）

ピリカが近くに集まっていた村人に聞く。

村人は困惑した表情で、少年を一瞥して言った。

「ヨハンが何かやったらしい」

ヨハンは、村の中で少し有名な存在だった。

悪戯が好きで、多くの村人がその被害にあっていたからだ。

「ほら、壊れちまっているじゃねえか！弁償しろ！」

「違うつて！俺のせいじゃない！」

商人はヨハンを責め立て、ヨハンはそれを必死になって否定していた。

シンはたまらず、商人とヨハンの間に入っていった。

「何があつたんですか？」

「ん？ 兄ちゃんこのガキの知り合いか？」

「はい。この子の世話役の様なものです。この子は何をしたんですか」

商人はにやりと笑い、シンに話しかけた。

「ちょうどいい。兄ちゃん聞いてくれよ。お前さんところのこのガキがな。うちの大切なこのアーティファクトをぶっ壊しちゃったん

だ」

「シン兄ちゃん違うんだ！俺はちょっと触っただけなんだ！」

泣きそうになりながら。ヨハンは必死に訴える。商人はそんなヨハンをせせら笑い、彼にすごむ。

「こういうことする奴はいつもそういうんだよな。金が無いのか？ああ？俺はな坊主。専属の軍隊がいる商会に所属しているんだ。どんな方法を使っても金を出させるぞ！」

国という概念がない時代のため、治安を守っているのは警察などではなく、商人と手を組んだ兵隊だった。

法律ではなく金銭で動く兵隊に、情けや容赦はない。

おそらくこの商人は、商品の代金が弁償されなければ、ヨハンを人買いにでも売りつけるつもりだろう。

それを拒否すれば、彼の息がかかった兵隊が、村を襲撃してくるかもしれない。

それをヨハンは理解していた。ヨハンの顔から血の気が引き、小さな手は震えていた。

ヨハンは、助けを請うかのように、シンを見る。

「ヨハン。本当に、君は何もやっていないんだね」

シンは静かにヨハンに聞いた。ヨハンは大きく頭を縦に振った。

「解った。僕が何とかしよう」

響く心（3）

「なんだい兄ちゃん。あんたが肩代わりしてくれるのか？ あんまり金持ちには見えないが」

訝しげに商人はシンを見る。

「もし本当なら、そうします。けれどその前に一つ、聞かせて下さい」

シンは商人の目をまっすぐ見つめた。

「あなたは、本当の事を言っていますか？」

商人はため息をつき、答える。

「当たり前だ」

—大丈夫、これがもともとから壊れていた事を、こいつは知らない—

まるで二重音声の様に、商人の相反する言葉が、シンの耳に、そして心に届いた。

今の時点で、商人が嘘をついている事は判明したが、まだ、足りない。

シンは商人に揺さぶりをかけることにした。

「それ、もともとから壊れていたんじゃないですか？」

商人の顔に刹那、驚愕の色が浮かぶ。が、すぐにそれを隠す。

「おい兄ちゃん。いちゃもん付けるんなら証拠を見せな」

「大丈夫。これはブラフだ。こっちが仕掛けた細工を見破るような
玄人じゃない」

二重の声とともに、商人が頭の中でイメージしている細工の仕組み
が、シンの頭の中に流れ込む。

「残念ながら、僕はその玄人なんです。弱い接着剤で壊れた陶器を
つなげる。それを手に取り、持ち上げると、接着剤の力が弱いため、
ぼろっと真っ二つ。まるでその人が壊したかのように思わせる。あ
なたが仕掛けた細工。とても単純ですね。よくこんな幼稚な手を使
えるものだ」

商人の顔から大量の汗が噴き出る。勝負はもう決まっていた。
頭の中に、商人の混乱した思考が流れ込む。

シンは顔をしかめ、シンは“力”のスイッチを切った。
事態は決着したかに見えた。しかし、商人は一つの事に気付いた。

シンが一つ。決定的なミスをしていた事を。

響く心（4）

「ちよつとまで、俺はお前が玄人なのかなんて聞いてないぞ。おまえ、まさか＜響覚く＞を使えるのか？」

今度はシンの顔に動揺が走る。それを見て、商人は意地悪く、わざと皆が聞こえるようにしゃべり始めた。

「人の事を詐欺師呼ばわりしておいて、何だおまえだってそう変わらないじゃないか！ 人の心を盗み読み、人を惑わす＞響覚者＜さんよお！」

周りの村民達が、どよめく。それだけ響覚者という単語が持つ意味は、果てしなく重いものだった。

「けがらわしい響覚者め。今、俺の心を読んだみたいに、他の連中の心も盗み見てきたんだろう！ ああ、もうこんな村には二度と来ねえ。この化物めっ！」

そう言い捨てると、商人は荷物を素早く手に取り、逃げるように村から出て行った。

しばらく、沈黙が流れた。シンは周りの村人たちを見る。

が、彼らはシンと目をあわそうとしなかった。

村民たちの中から、村長が厳しい顔をして、シンに近づいてきた。

「シン、今あいつがいつていた事、本当か」

シンは静かに、無言で頷いた。

「シン、悪いが……此の村を出ていってくれ。響覚者がここに居ると……」

「わかってます。今夜、この村から出て行きますから。心配しないでください」

村長の言葉をさえぎるようにそういつと、シンは自分の小屋に戻っていった。

後ろから、ピリカが呼び止めようとする声が聞こえたが、シンが振り返ることは無かった。

第四章：偽りは涙の味

出ていく準備は、驚くほどすぐに出来た。

このような事には慣れていたから、部屋には最小限のものしか置いていなかった。

ロコロ村から最寄りの街には、一日歩けばたどり着くが、深い森の中を通らなければいけない。

着替えと食料などの必要なものをいくつかバッグに入れ、地図とコンパスをサイドポケットに入れる。

そして、腰のベルトに、父親から受け継いだひと振りの剣を差し込む。

「ここも、ダメでしたか」

シンの背後から、渋みのかかった、男性の声が聞こえる。

「久しぶりに声を聞いたよ。ヒューイ。ゴメンな。響覚を使ってしまったから、もうここを離れなきゃ」

声の主であるそのタ力は、頭をこくりと下げて、続ける。

「いえ、坊ちゃんが謝る事はないです。あなたがいる場所が、私の居場所ですから」

「ありがとう」

シンは、ヒューイの喉を指で撫でて、テーブルに置かれている、今日の朝届いた本「響覚という存在についての研究と実態」に目に向けた。

ページを開き、その定義のページに目を通す。

きょうかく
— 響覚 —

視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などの、五感のどれにも属さない感覚機能の一つ。

響覚の力を発現、自覚している人間は、響覚者と呼ばれる。

響覚者は他者と自らの心を共振させることにより、他者の思考を読み取ることができる。

また人間だけでなく、動物の思考も読み取る響覚者の存在も確認されている。

響覚を使いつつ、正気を保てる人間は非常にまれで、多くが響覚を自覚して数カ月から一年で精神崩壊を起こす。

人間の複雑な思考が脳内に流れ込む事のストレスと、

他者の思考と発言のずれから人間不信に陥るためであると推測される。

ごく稀に、正気を保ちつつ、響覚を自分の意思でコントロールする事が出来る

強靱な精神を持つ響覚者が存在するが、一年以上特定の他人と行動を共にすると、

響覚をコントロールする事が出来なくなり、無差別に相手の思考を読み取ってしまう。

そのため、響覚者は一人で行動する事が多い。

また、犯罪に利用する者や、人心を惑わす者が一部いるため、

社会からは響覚を持っているというだけで偏見の目で見られてしまうのが現状。

偽りは涙の味（2）

他の本で何度も読んできたこの響覚についての説明を、シンは読んだ。

そして、自分を戒める。

今日自分が響覚者だとバレていなくても、どうせもうすぐ一年がたってしまう。

皆のためにも、自分のためにも、ここを離れなければいけない。

そんなこと、今まで散々経験して、解りきっていた事なのに。

なぜだろう。

とても胸が苦しい。

まるで締め付けるような、

息が苦しくなるような胸の苦しみ。

そして、井戸の底の中から、決して手の届かない空を見上げるような絶望感。

首に下げているヘッドフォンに触る。そしてその理由に気がついた。

一年間。夢を見ていたのだ。望んではいけない幸せな夢を。

自分は求めてはいけないのだ。人と一緒にいるなんて事を。

夢を見てはいけないのだ。人と仲良くなるなんて事。

大切な人達、笑顔で武術の稽古に来てくれていた子供たちを思い出す。

お金がなくて食べるものが無いとき、おいしいスープをくれた定食屋のおばちゃんを思い出す。

仕分けを手伝った後、勉強を教えてくれた村商人のおじさんを思い

出す。

いつも身の回りを世話してくれた、村長のことを思い出す。

よそ者の自分を分け隔てなく接してくれた村のみんなを思い出す。

そして、行き倒れていた自分を助け出し、姉のように自分を守ってくれた、ピリカ笑顔の思い出。

自分の受け継いだ名前の意味を思い出せ。

自分はここにいてはいけないのだ。

この人達が幸せなら。不幸な目にあわないのなら。

僕は自分のことなんてどうでもいい。

自分が求めることで、みんなを不幸にするというのなら。

僕は求めることをやめる。

彼らが幸せになるために、地獄に落ちろといわれても、僕はかまわない。

シンは、本をバッグの中に入れる。

そして、ヒューイとともに、もう二度と帰ってこないであろう小屋を後にした。

偽りは涙の味（3）

外に出ると、太陽は沈み、あたりは暗くなっていた。村は静まり返っている。まるでゴーストタウンのような静かさだった。

シンは黙って村の出口に向かう。

村の出口である門の近くまで来て、門をくぐろうとした時に、ふと背後に人の気配がした。

「待って」

振り向くと、そこにはピリカが立っていた。

手には何かが入った袋を一つ。お互い、しばらく何も言わなかった。鈴虫の鳴き声だけが、辺りを包んでいた。

「ピリカさん。今まで黙っていてすみませんでした」

シンは頭を下げた。謝って解決する問題ではなかった。

けれど、それ以外、思いつかなかった。すると、後頭部にゴツンと軽い鈍痛がした。

「スイマセンなんて言わないでよ」

顔をあげると、ピリカは拳を握り、うつむいていた。

「シンはいつもそう。人に何も言わないで、全部自分のせいにしてお願い。スイマセンなんて言わないで。あなたは何も悪くないのに、自分を傷つけるのは、もうやめて」

あたりは暗くて、ピリカがどんな表情で喋っているのか解らなかった。

ピリカの声は、かすかに震えていた。

ピリカは手に持っていた袋をシンに渡す。

「さっきお母さんがね、シンのために作ってくれたの。これなら食べちゃえば荷物にならないし、シンが喜ぶだろうからって。ヨハンも一緒に手伝ったんだよ」

中を見ると、シンが好きな卵サンドが入っていた。

「お父さん。あの時は厳しい事言っていたけど、家に帰ってから泣いていた。あのお気楽なお父さんがだよ？ シンはいつもみんなのために頑張ってきたのに。シンが一番つらい時に追い出すような真似しかできない自分は村長失格だって」

ピリカは続ける。

「お父さんの知り合いの人が森を越えた街にいるの。さっき伝書鳩で事情を説明した手紙をその人に送ってた。その人はあなたの様なお人を手助けしているから、その人に会いに行きなさいって。袋の中に連絡先と紹介状が入った封筒が入っているわ」

ピリカは止まらぬ涙を、服の袖で顔をぬぐいながら話し続ける。

「シン、あなたがどんな力を持っていようと関係なかった。初めてあったときから、あなたのその深い悲しみに満たされた瞳を見たその時から、ずっと、あなたを助けたかった。守りたかった。私は、あなたのことを、あなたのことが……」

シンは無言でピリカに背を向ける。

「どこかで、いつかまたあえるよね？」

ピリカはすがりつくような声でシンに語りかける。シンは振り向かず、静かな声で一言だけこう言った。

「僕はもう二度と会いたく無いです。僕のことなんて、忘れて下さい」

ピリカの呼び止めようとする声を振り切るかのように、シンは口村の門をくぐり、深い森の中に足を踏み入れていった。

ピリカは大粒のナミダを流しながら、誰にも聞こえないような小さな声で、呟いた。

「シンのバカ。泣き声でそんなこと言っても、説得力無いよ」

第五章：光の花

「今日は月がきれいだ」

月明かりで、青白く光る森の中を歩きながら、シンは夜空に浮かぶ月を眺める。

肩にとまったヒューイが、シンに語りかける。

「覚えていますか。坊ちゃんが私と旅に出た最初の夜も、今日の様な、綺麗な月でした」

シンは頷く。

「そうだね。泣きたくなるくらい綺麗だ」

「素晴らしい村でしたね」

「うん。けれどヒューイは辛かったろう。僕が響覚を使わずにいたから、お前の好きなお喋りもできなかったしね。でも大丈夫。今日からまた自由に喋られるよ」

シンは明るい声で言った。ヒューイは哀しそうな顔をして、シンを見る。

「失礼を承知で言いますが」

ヒューイはそう前置きして話す。

「坊ちゃんのこういふときの笑顔。私はあまり好きではありません」

シンは少し驚いた顔でヒューイを見た。

「坊ちゃんは本当に辛い時、いつもそうやって笑います。辛い時は辛いと言ってください。坊ちゃんはその笑顔を見ると、私はいたたまれないのです。坊ちゃんのような方がなぜ、こんな目にあわないといけないのか。私にはわかりません」

シンは人差し指の腹でヒューイの喉をなでる。

「仕方ないよ。たぶんこれはもう仕方ないんだ」

ふと、シンは立ち止まり、後ろを振り返った。

月明かりだけの深い夜の森をじっと見つめると、

まるで、今まで進んできた道が、

初めから存在しなかったかのような錯覚を覚える。

しばらくその闇を見つめていると、

なんだか闇に自分が飲み込まれるような錯覚に襲われる。

まるでそんな考えを振り切るように、シンはきびすを返し、再び歩き始めた。

光の花（２）

何時間ぐらい歩いただろうか。

次第に月がしずみ、代わりに太陽が木々と雲の間から顔を出してきた。

太陽を見たシンはかつて、自分の母が教えてくれた童謡を口ずさむ。シンが寝付けないとき、よく母は歌ってくれた歌だ。

真つ暗闇に覆われて、行き先見えぬ、僕と君

心はすっかりすすけてて、ふさぎこんでた君と僕

それをみていた神様は、光のしずくを与えたよ

空に輝く光のしずく光、僕らの心を照らし出す

あまりにきれいで僕たちは、ぼろぼろ涙を流してた

流れる涙は心を洗い、僕らは歓び声揚げる

光は僕らを導いた、光が僕らを温めた

空に輝く光のしずく、まるで光の花だった

「【光の花】ですか。懐かしいですな」

ヒューイがポツリとこぼす。

「たぶん、ここの光のしずくって言うのは太陽なんだろうね」

ゆっくりと顔を出してきた太陽を眺め、シンは言う。

「僕は太陽が好きだ。どんなに落ち込んでいる日も、悲しい日も、寂しい日も、太陽は必ず昇る。そんな太陽が、今日も昇ってきたんだ」

シンは荷物を背負いなおし、平手でほほをたたき、気合を入れる。

「さあ、今日もがんばろう」

シンの足取りが、少しだけ軽くなった。

光の花(3)

太陽がちょうど頭の真上に來たのを確認して、シンは昼食を摂ることにした。

ピリカからもらった袋をバッグから取り出し、中の卵サンドをひとつ取る。

なんだか形がばらばらなのを見て、シンは少し笑ってしまった。

ヨハンが母に手伝ってもらって作ったというその卵サンド。

ゆっくり味わって食べよう。

そう思つて口をあけたとき、誰かの声が、シンの耳に届いた。

「ヒューイ、何か言つた？」

シンがたずねると、ヒューイは首を振つた。

シンは耳を澄ます。どこかで誰かが迷っているのかもしれない。

(……かがすいた)

かすかだが、今度は確実に声が聞こえた。

シンは手に持っていた卵サンドをバッグにしまいこんで立ち上がる。

「どうかしました？」

ヒューイは首をかしげ、シンにたずねる。

「近くに誰かがいるみたいだ。おそらくそう離れていない。もしかしたら遭難しているのかもしれない」

シンは声のする方向を向く。声は森の道からそれた方向から聞こえ

てきていた。

この深い森の中、地図に載っていない道を歩くことは、下手をする
と自分も遭難する可能性もある。

しかし、シンの心はもう決まっていた。

「私が止めても行くんでしょうね。坊ちゃんは」

「当たり前だよ、遭難しているなら助けないと」

「遭難じゃないかもしれませんよ」

何かを言いたそうに、けれど言えなさそうにヒューイはシンを見る。

「もし、仮に遭難じゃなくて、この森の中にいるのなら、目的は一
つだろうね。でもだったら、なおさ

ら僕は行かないといけない。自殺なんて馬鹿げてる。話を聞いてく
れる人がいるだけで、大分違うもの
だからね」

「坊ちゃんまで遭難してしまうかもしれません」

「そうだったら」

一呼吸おいて、シンは言う。

「それが僕の寿命だったってことさ」

第六章：誰がため、我がため

(……なかすいた)

歩いていくごとに、次第に声が鮮明になっていく。しかし、声の主は一向に見つかる気配はない。シンの顔には、次第に焦りの色がにじみ出てきた。そんなシンを見て、ヒューイは一つ提案した。

「坊ちゃん。私は空から探します。何かあつたら鳥笛で私を呼んでください」

シンは頷き、まず腕を伸ばす。

ヒューイがひじから先に移動するのを確認してから、ゆっくりと腕をあげる。

ヒューイはその巨大な羽を広げ、飛んでいった。

それを見届けると、シンは聞こえてくる声に集中する。

(……おなかすいた)

ようやくはつきりと何を言っているのか聞こえた。

女の子の声だった。

思考イメージをたどる事が出来れば、どこにいるのか解るのだけだ、と、

意識が途切れ途切れになっていて解らない。

「まずいな」

シンの脳裏にある仮説が浮かぶ。

深い森の中、一人。途切れ途切れの意識。

そして空腹であるという状態。

それらから考えると、おそらくこの声の主の少女は行き倒れている可能性が高い。

早く見つけてあげないと、そのまま飢え死にしまうかもしれない。

「坊ちゃん！」

空から声が聞こえて、シンは腕を伸ばす。その腕にヒューイがゆっくりと降りてきた。

「早かったね。何か手掛かりはあったかい？」

「ここから少しいったところに、一つの家があります。その中に一人の少女が眠っていました。おそらく坊ちゃんが聞いた声の主はその子かと」

シンは安堵した様子で胸をなでおろす。行き倒れではないようだ。

「しかし」

ヒューイは続ける。

「おかしいことに、その子の身体が動いていないのです」

誰がため、我がため（2）

シンは不思議そうにヒューイを見る。

「寝ているのなら動かないのが普通なんじゃない？」

ヒューイは首を振る。

「普通、生き物は寝ているときも、呼吸をすることで少しですが身体が動きます。しかし、その子を見る限り、そういうかすかな動きがなかった。まるで仮死状態の動物を見ているようでした」

シンは少し考えた後、ヒューイに尋ねる。

「要するに。普通じゃなかったってこと？」

「はい。それと南南西の方角から大きな雨雲が近付いてきています。しばらくしたらここに強烈なスコールが降るでしょう。このまま森の中にいるのは危険です。少女の様子が気になりますし、家のほうに向かってみませんか？ ついでに雨宿りもさせてもらえるかもしれません」

「そっか。それじゃあ決まりだね。その女の子のいる家に行ってみよう」

ヒューイを肩に乗せ、シンはその家があるという方向へ歩いていった。

誰がため、我がため（3）

赤レンガのこぢんまりとしたその家は、森の中にひっそりと建っていた。

まるで森というバリケードで、外部から隔絶されたような家だとシンは思った。

失礼だと思いつつ、ガラス窓から中をのぞく。

質素なテーブルに椅子が二脚。そしてその奥にベッドがひとつ見える。

そのベッドには、たしかに一人の少女がこちらに背を向けて寝ているのがみえる。

シンの頭の中に、いろいろな種類の食べ物のイメージが流れ込んでくる。

どうやら本当にお腹がすいているらしい。

シンはドアの前に立ち、ノックをしようとしたが、ふと頭にある言葉を思い出す。

（化け物）

村で商人が言った言葉だ。そして、今まで散々言われてきた言葉でもある。

一年間、あの暖かい人達がいる村にいたから忘れかけていた。そうだ。自分はできる限り人とはかわってはいけないのだ。相手を傷つけるかもしれないし、自分も傷つくかもしれない。この少女を自分は傷つけるかもしれない。

そして、この少女が、自分を傷つけるかもしれない。そう思うと、手が動かなくなった。

否定されたときの困惑。敵意を向けられたときの恐怖。拒絶されたときの絶望。

忘れていた感情が、まるで津波のようにシンの心を飲み込む。

「やっぱり、やめておこう」

シンは一步ドアから離れてヒューイに言う。

「この子はきつと大丈夫だよ。遭難しているわけでもないし、ちゃんと家の中にいる。今は一人だけれど、きつと今だけ両親が留守をしているだけさ。だから大丈夫。きつと大丈夫なんだ」

困惑するヒューイに、まるで言い訳をするようにシンは言った。もしかしたらヒューイが言っていたように、少女は普通じゃない状態なのかもしれない。

もしかしたらこのままだと危険なのかもしれない。

けれど、シンは怖かった。人に嫌われることが猛烈に怖かった。シンは改めて、自分の心の弱さを恥じた。けれど、どうしようもなかった。

気がつくと、あたりが暗くなっていた。

まだ日が暮れるには早い。しかし、まるで夜のように暗くなっていた。

「ぼっちゃん！ スコールが来ます！ 早くあの家の中に！」

いつもは冷静なヒューイが、珍しく声を荒げた。

じかに雨雲を見てきて、その規模を知っているからだろう。

「でもきつと開かないよ。ほら、鍵が閉まって……」

シンがそっぴいながらドアの取っ手に手を掛けると、いとも簡単にドアは開いた。

呆然として開いたドアをシンは見つめる。

「ほら坊ちゃん！ 遠慮してる場合じゃないでしょう！」

ヒューイにせかされて、シンは躊躇しながら家の中に入った。

第八章：深い眠りの中の君

ドアを閉じたその後、屋根を何かが叩く音が聞こえ、その音は次第に強くなった。

窓から外を見るとすでに雨で外の景色が見えないほどになっていた。

「間一髪といったところでしょいか」

ヒューイは胸をなでおろす。

「こんなの、まるで物盗りじゃあないか」

「時と場合によります。今回はやむを得ない事情があるので大丈夫でしょう」

「都合のいい解釈のような気がするけど」

「すこしは都合よく考えていけないといけませんよ」

シンは一つため息をつき、ベッドに寝ている少女を見る。

眠っている女の子が一人の家に、無断で侵入。

ピリカさんが知ったらどう思うだろう。

少なくとも三時間以上ぶっ続けで説教されるだろう。

でもまあ、ピリカさんにあうことはもうないのだろうけど。

そんなことを考えていると、また空腹を訴えるイメージがシンの頭の中に流れ込んできた。

普通こんな空腹だったなら目が覚めるのに、少女はぴくりとも動かない。

たしかに、少し不自然かもしれない。シンはおそろおそろ少女の寝

ているスピード近づいた。

深い眠りの中の君（２）

少女は大きな耳当て帽子をかぶっている。

帽子の下に覗く艶やかな栗色の髪。

そして、まるで世界中の幸せに包まれているかのような、あどけない、愛らしい寝顔。

シンは、なぜか自分の顔が熱くなっているのを感じた。

その幸せそうな寝顔を見て少し起こすのを躊躇ったが、

ヒューイがいうように、体が全くとっていいほど動いていない。

そして、心なしか、顔色も悪い。シンは意を決して、少女を起こそうと、肩に手を触れた。

すると、少女の瞼が、ゆつくりと開いた。深い藍色の瞳が、シンを捕らえる。

まるで宝石のような、美しい瞳だった。少女の口が、かすかに動く。しかし言葉にならず、かすれた息が、ひゅうひゅうと鳴るだけだった。

「おなか、空いているのかい？」

シンが尋ねると、少女はわずかに首を動かす。

シンはバッグの中から水筒を取り出し、少女を抱え起こす。

そして、少女に少しずつ水を飲ませた。水筒の水を半分くらい飲ませた後、シ

ンは袋の中の卵サンドを少女の口元に近づける。

少女はゆつくりとその卵サンドをほおばる。

「おいしい」

一言、少女はというと、一口、また一口卵サンドをほおばった。

食べることに、その速度は速まり、
すべての卵サンドを平らげた頃には、少女の顔色はすっかりよくな
っていた。

「ごちそうさまでした」

少女は丁寧の手を合わせ、シンに頭を下げた。

「よかった。元気になったみたいだね」

そして、少女はしばらくシンを見つめた後、ほほえみながら、頭を
傾げてシンに尋ねた。

「あなた様は、どちら様？」

第九章：君は大丈夫

シンは自分が旅の途中でスコールに巻き込まれそうだったから、悪いとは思いつつ、雨宿りをさせてもらう為にこの家にお邪魔させてもらったと説明した。

少女は少し不思議そうな表情をして、窓の外を見る。

静まる様子のないスコールをしばらく眺めながら、少女はシンに尋ねた。

「旅人さん、あんなに積もっていた雪はどうしたのですか？」

シンは首をかしげた。季節はもう春だ。雪なんて降る訳ない。そう少女に伝えた。

「今は、春」

シンの言葉を、まるで咀嚼するかのように少女は繰り返す。

そして、家の中を見渡し、あることに気がつき、目を見開き、ベッドから飛び起きた。

「春ですって？」

少女は動揺した様子で、窓に近づき、スコールが降る外の景色を、食い入るように見つめた。

そして、振り返ってシンに問いつめた。

「先生は、先生はどこへ行っ たんですか？」

少女は取り乱しながらシンの体を揺する。

その瞳には、うつすらと涙が浮かんでいた。とりあえず、落ち着か

せないといけなさそうだ。

「クッキーがあるんだけど、よかったら話しながら食べないかい？」

「そんなことしている場合じゃ」

ないと言おうとしたその声は、元気になった少女のお腹の音でかき消えた。

「お腹が減っているといいことないよ。まずは落ち着いて」

少女は何かを言いたげな表情をしたが、シンの言葉にうなずいた。

君は大丈夫（2）

シンはクッキーをテーブルに広げる。

そして少女の煎れたお茶を一口飲みながら、少女の話を聞いた。

少女の名前はリュヴリュといい、先生という老人と一緒にこの家に住んでいるという。

リュヴリュは両親の記憶がなく、その先生という老人に育てられてきたらしい。

そして、ある日。

先生と一緒に食事をとった後、急激な眠気におそわれて、リュヴリュは眠り、

気がついたらシンに起こされたという。

「眠ったときは、雪がまだ降っていたのです。私はよく寝坊をしていましたが、数ヶ月眠るようなことはなかったんです」

シンは話を聞きながら考える。

確かに、数ヶ月も眠り続けるなど通常では考えられない。

眠る前の食事に、何か睡眠薬のような物が混ざっていたと考えるのが妥当だろう。

しかし、なぜ先生とやらは、そんなことをしたのだろうか。

「私は、捨てられてしまったのでしょうか」

今にも泣き出しそうな顔で、リュヴリュは言う。

シンは考える。それが一番可能性としては高い。

しかし、そんな答えを目の前の少女が求めているとは思えない。そこで、シンは一芝居打つことにした。

君は大丈夫(3)

ピリカからもらった袋の中を探り、村長からの手紙を取り出し、少女に見せる。

「さっきテーブルの上を見たら置き手紙があったんだ。ちょっと読んでみるね」

リュウリュウが頷くのを見て、シンは手紙を読み上げるふりをして、即興で話を作った。

「まず、はじめに謝らないといけないな。突然いなくなってすまない。

私はしばらくこの家を留守にしないといけなくなった。

甘えん坊のお前のことだから、きつと直に言う私を引き留めるだろう。」

だから、強引だが一服盛らせてもらった。

しばらく会うことができなくなるが、心配しないでいい。

いつか必ずお前に会いに来る。

それと、今日の前にお前を起こした人がいるだろう。

その人の話を聞きなさい。お前の力になってくれるだろう。

それじゃあ、いい子にしているんだよ。――

ちょっと強引だったか。シンは疑われないか不安になるが、

「よかった。私捨てられたんじゃないんだ」

リュウリュウが安心した様子でつぶやいたのを聞き、ほっと胸をなでおろした。

「そうさ。君は捨てられてなんかない。君、リュヴリュって呼ばれていたんだよね？」

「はい」

リュヴリュは頷く。

「名前にはそれぞれ意味があるんだ。君の名前、リュヴリュにも意味がある。なんて意味か知ってるかい？」

リュヴリュは首を横に振る。

「どういう意味なんですか？」

「ここら辺で使われていた古代語、ロシア語で、【愛する】って意味なんだ。そんな名前を持っている君が捨てられるわけがない」

「【愛する】、ですか」

リュヴリュはシンの言葉を繰り返す。

「そう。だから今は落ち着いて、クッキーでも食べよう」

リュヴリュは笑顔でうなずき、クッキーをほおばり始めた。

第十章：言葉の世界が紡ぐ言葉

しばらくの間、シンはリュヴリュと話をした。

話の内容は、たわいのない物だったが、リュヴリュは楽しんでいるようだった。

先ほどの悲しそうな表情は、すっかりと消えて、こわばっていた表情も柔らかくなった。

「そういえば、さっき話してくれた【古代語】ってなんですか？」

リュヴリュは残り少なくなったクッキーをほおびりながらシンに尋ねた。

「ああ、古代語ってのはさ、今は使われなくなった地方ごとの言語の事だよ。ここら辺は昔ルシア語という古代語が使われていたんだ」

「へえ、昔は言葉がたくさんあったのですか。大変ですね」

「まあ、確かにね。古代語はもはや過去のもの。使う機会はほとんどない」

リュヴリュは不思議そうに首をかしげる。

「なら、なんでわざわざ使われなくなった言葉を知っているのですか？」

確かに使わなくなった言葉を覚えるのは無駄かもしれない。そうシンは答える。

「僕が古代語を覚える理由はね。言葉が一つの世界だからなんだ」

言葉の世界が紡ぐ言霊（2）

「世界、ですか？」

リュヴリユはシンの言葉を反芻した。それに、シンは頷き話を続ける。

「そう、言葉にはその言葉を使っていた話者たちの世界。そして魂が宿っているんだ」

「話者たちの魂、ですか」

いまいちピンとこない様子のリュヴリユに、シンはさらに説明をする。

「たとえば“雪”なんてのはさ、共通語のブリテン語では一つしかないよね？ でも、ここをずっと北に行ったところにある、雪しかないような場所で生きている人たちの古代語で【雪】は何十通りもの表現で表せられるんだ」

「そんなにあるんですか」

リュヴリユは驚いた表情を浮かべた。本当に表情豊かな子だなとシンは思いつつ、話を続ける。

「そう、赤い雪、青い雪、雨っぽい雪、強い雪、こまやかな雪。本当にたくさんあるんだ。いうならば、言葉にはその話者達の魂が宿っているんだよ。その国の人が物事をどう見ているか。その国の人がなにを信じているか。その国の人が世界をどんな風に捕らえているか。そういうのが全部言語に入っているんだ。だから、言語って言うのは一つの世界であり、魂なんだ。でも、もう言葉は死のうとしている」

「ブリテン語があるから、でしょうか？」

リュヴリュが自信のなさそうに小さな声で言うと、シンはうなずく。

「そう。だけれどブリテン語が悪い訳じゃない、確かにみんな同じ言語を話せば便利だね。どこに行っても言葉が通じるってのは商売する上でとても都合がいい。けど、それによって古代語が死んでいくはつらい。だから、僕は古代語が好きだし、守っていくべきものだと思う」

ふとシンは思わず喋り込んでいた事に気づいた。

悪い癖だ。言葉のことについて話すと、つい熱が入ってしまう。

シンはリュヴリュが退屈しているのではないかと心配になった。

しかし、彼女の顔を見て安心した。その目は好奇心で輝いていたからだ。

言葉の世界が紡ぐ言霊（3）

「すごい、旅人さんは物知りなんですね！」

「本ばかり読んでいたからさ。まあ、無駄な知識が多いけれど」

照れくさそうにシンは言う。

「なんだか不思議です。旅人さんってなんだか先生と少し似ています。先生も、よくこうやって私に世界について教えてくれました。私はその時間がとても好きだったんです」

ふと、リュヴリュはある事に気がついた様子で、申し訳なさそうにシンに尋ねた。

「あつ、すみません。まだ旅人さんのお名前を聞いていませんでした。よろしければ教えてもらえませんか？」

ちょっと、シンはためらった。出来ればその話題には行きたくないと思っていたからだ。しかし、目の前のリュヴリュの、期待で一杯の瞳を失望させたくは無かった。

「ああ、僕はシンっていうんだ。んで、あそこにいるのは相棒のヒューイ」

ヒューイは一声鳴いて、シンに答えた。

「シンさんにヒューイさん。お二人の名前にも意味はあるのですか？」

シンは頷く。

「ヒューイって言うのは、昔戦争で人を乗せて飛んでいた鉄の鳥の名前なんだ。回転する羽が胴体に二つ、尻尾に一つあって、とても大きかったから人が何人も乗れたらしい」

リュヴリユはヒューイを見て、こっちのヒューイさんも大きいけれど、

人は乗れなさそうですねと笑った。

「ちなみに道具に名前が付いている場合もある。僕の持っているこの剣にも名前があるんだよ」

シンは自分の腰のベルトに差し込んでいた剣を外して、リュヴリユに見せる。

「不思議な形の剣ですね。今まで見たことが無い形です」

「この剣は“メイキヨウシスイ”っていうらしいんだ。お父さんから受け継いだ剣なんだ。けど、お父さんも意味は知らなかった。どんな意味か知りたいんだけど、どこの言葉がわからないんだ」

リュヴリユは残念そうに肩を落とした。この子は本当に好奇心が旺盛なんだなあとシンはぼんやりと考えた。

「それじゃあ、シンさんの名前の意味は何ですか？」

言葉の世界が紡ぐ言霊（4）

とうとうリュヴリュはシンに尋ねた。

できれば言いたくなかった名前の意味を。

「道徳上の罪」

自嘲気味に話すシンを、リュヴリュはポカンとした表情で見つめた。

「【シン】って名前はね。僕の両親が付けた名前じゃないんだ。これは僕のいた部族の間で、あることをできるようになった人間が代々受け継いできた名前なのさ」

リュヴリュはおそろおそろシンに尋ねる。

「シンさんは、なにができるようになったんですか？」

「道徳上してはいけないこと。出来てはいけない事。名前の通りさ。」

リュヴリュはしばらくシンを見つめた。

その純粹な視線に、シンはたまらずその視線から目をそらした。

流れるような楽しい会話はぱったりと止まり、静かな沈黙が流れる。その沈黙を破ったのはシンだった。

「申し訳ないけど、僕はそんな奴なんだ。黙っていてごめん。できればいいんだけど、雨が上がるまでここにいることを許してほしい。雨が上がったらすぐに出て行くからさ」

リュヴリュは頷き、シンを客間に通した。

「よかつたらここで少し休んでいてください。たぶんこの調子だと雨は一晩中降るでしょうから」

シンは感謝の意をリュヴリュに伝えて、ヒューイとともに客間に入る。

「私はちょっと知りたい事が出来たので、書斎に行きます。もし何かあったら言ってくださいね」

そういうと、リュヴリュはぱたりとドアを閉めた。

言葉の世界が紡ぐ言霊（5）

シンは客室のベッドに寝そべり、ぼんやりと天井を眺めていた。眠ってみようと目を閉じるが、眠れそうもない。

「なぜ、言ってしまったのですか？」

ヒューイがシンに尋ねる。心なしか、非難するような口調だった。

「解らないよ」

シンはぼんやりと答える。

「確かに、言わなければ、楽しいひとときで終わったかもしれない。彼女が望む、楽しい話を続ける事が出来たんだろうね」

「それなら、なぜ」

「彼女の瞳さ」

ヒューイの言葉をさえぎって、シンは言う。

「彼女の澄んだ瞳を見て話していたら、なんだか隠し事をしてはいけない気がしたんだ。したくなかったんだ」

澄みきった湖の様な、彼女の瞳は、まるで自分の内面まで写し出しているようだった。そんな瞳の前で、自分の保身のための隠し事はできなかった。

「あともうちょっと話していたら、あの手紙が嘘だつてことも言うてしまいそうです。その代わりに自分の事を言っただ」

ヒューイはため息をついて、坊ちゃんが悪人にはなれませんねとつぶやいた。

言葉の世界が紡ぐ言霊（6）

ベッドに横になってからどれくらいの時間がたったのだろうか。
数時間たった気もするし、たった数十分しかたっていないような気もする。

豪雨だった雨は、次第に小雨になってきた。

シンはバッグからペンと紙を取り出して、

リュヴリュに雨宿りをさせてくれたことについての感謝の言葉と、
もしかしたら老人は自分が住んでいた村にいるかもしれないからそ
こを尋ねるようにと手紙を書き、
封筒にその手紙と、村への地図を同封した。

今彼女は調べものに夢中だ。

あまり邪魔をしたくない。

今は雨も殆ど小降りだ。

出発するのに支障はない。

ただひとつ、リュヴリュの今後について気になるが、
きつとピリカさん達なら快く迎え入れてくれるだろう。
自分のできることはここまでだ。

こんなことしかできないのは心苦しいけれど、

こんなことしかないのが、

逆に一番いい事なのかも知れない。

リュヴリュはとてもいい子だ。

でも、これ以上自分と一緒にいたら彼女も不幸になる。

人の心が読めるようなヤツと一緒にいたら、彼女までとばっちりを
受けるだろう。

窓の外を見る。空が少しづつ白んできていた。
シンはベッドから起き上がり、ヒューイを肩に乗せて、静かにドアを開けた。

第十一章：咎、愛に包まれ

薄暗いリビングを、シンは静かに歩く。

書斎のドアの下から、わずかに光が漏れているのが見える。

出会ってから、ほんの少ししか経っていないし、もうきつと会うこともないだろう。

寂しくないといえば嘘となる。

けれど、そういうものなんだと自分を納得させる。

これが、自分の人生なんだと。

受け入れないといけないものなんだと。

クッキーを食べながら、楽しく話したあのテーブルの上に、シンは先ほど書いた封筒を置く。

さあ、これで最後だ。

テーブルに背を向け、シンはドアに向かって歩を進める。

ドアノブに手を掛け、シンはゆっくりとドアを開けようと手を伸ばした。

が、手を掛けようとした瞬間、

背後からドサドサツという何かが崩れ落ちる音と、短い悲鳴が聞こえた。

音は書斎の方から聞こえてきた。シンとヒューイは顔を見合わせる。一体何が起きたのか。

少ししてから、かすかにリュヴリュがシンに助けを求める声が聞こえてきた。

「どうします？ 坊ちゃん」

ヒューイは意地悪くシンに聞く。

「どうするって、行くしかないよ」

書齋に向かおうとするシンを、ヒューイは制する。

「もし。坊ちゃんが今リユヴリユさんを助けに行けば、それによつてまた面倒事を被るかもしれませんが。それでもいいのですか？」

シンは、歩き出した。その方向は、ドアではなく、書齋だった。

「つくづく、坊ちゃんは悪人になれない人ですね」

ヒューイはやれやれとため息を一つつき、一言付け加える。

「でも、それでこそ私の主だ」

咎、愛に包まれ（２）

書斎のドアを開けると、シンの背の高さほどの本の山が出来上がっていた。

その本の山の中から、かすかにリュヴリュの声が聞こえる。

シンは、その声を頼りに本の山を掻き分けて、リュヴリュを助け出した。

「あ、ありがとうございます」

頭に本が当たったからだろうか、リュヴリュは頭をさすりながら、気恥ずかしそうに言った。

「ずいぶん沢山の本を読んでいたんだね。何を調べていたんだい？」

シンは山になった本のタイトルをいくつか眺める。

「言語の歴史」

「地方言語の起源」

「世界言語大全」

ほとんどが、言語に関する本だった。

ふとリュヴリュを見ると、その手には一つの辞書が握られていた。

「どうしたの？ それ」

シンが尋ねると、リュヴリュは今までに無い、真剣な表情でシンに言った

「シンさん。あなたに言わないといけないことがあります」

咎、愛に包まれ（3）

リュヴリュはほんの山から数冊の本を拾い、シンの手を引いて、リビングのテーブルに腰掛けた。

シンはリュヴリュが何をしたいかわからなかったが、その真剣な表情を見て、大切なことを彼女がいいたがっていることを理解した。

本をテーブルの上に置き、リュヴリュはシンを見つめる。

あの、すべてを映し出すような、藍色の瞳で。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「私を育ててくれた先生は、昔とても有名な学者だったんです。人文科学、自然科学、粹にとらわれずに様々な学問を研究していたみたいで、古代語も、その中に含まれていたようです。そのおかげか、書斎にも、古代語の本が沢山ありました」

リュヴリュは続ける。

「私、どうしても納得がいかなかったのです。たとえどんな理由があったとしても、自分の子供に『道徳上の罪』という意味の名前をつけることがあるのかって」

シンは黙って、リュヴリュの話に耳を傾けていた。

「シンさんは自分のことをずいぶん悪い人みたいに言うけれど、私はそう思えません。シンさんは私のことを助けてくれたし、励ましてくれた。そんな人が悪い人だとは思えないんです」

シンはなぜか無性に悲しくなった。この子は何も知らないからこん

なことといえるのだ。

リュブリュの瞳を見る。まっすぐなその瞳は、しっかりとシンの瞳を捕らえていた。

ヒューイが必死にシンがその言葉を言うのを止めようとしていた。けれど、シンは口を動かしていた。

「それは僕が人の心を読み取れる響覚者だとしてもかい？」

静寂の中。ヒューイの無念そうな鳴き声が響く。

そんな静寂を破ったのは、そんな静寂にまったく合っていない、リュブリュの嬉しそうな声だった。

咎、愛に包まれ（４）

「ああやっぱりそうだったんだ。これで全部つながりました。なるほどなるほど」

思わぬ反応に、シンは呆然とした。

「なんで？ なにが？ いつから？ どうして？」

断片的に口から出る疑問形の言葉をシンは羅列する。

そんなシンをみて、リュヴリュは上機嫌に話す。

「シンさんは言っていましたよね。言葉はひとつの世界だって。それで私思っただんです。共通語で罪という意味のシンという名前も、もしかしたら、どこかの古代語では全然違う意味かもしれないって」

そして、リュヴリュは沢山の本の中から一冊の辞書を取り出した。

「そうしたら、やっぱりあったんです。ここから南東にずっと行っただころの島国の古代語では、シン、あなたの名前は全く違う意味でした」

「どういつ、意味だったの？」

恐る恐る、シンはリュヴリュにたずねる。

「それは心こころです。人の心が読める。だから心しんなんですよ。道德上の罪（sin）なんかよりよっぽどぴったり合っています」

胸を張ってリュヴリュは主張する。

「でも、そんなのこじ付けじゃないか」

シンはわれに返って反論した。そうだ。変な期待をしてはいけない。自分とその島国が関係していなければ、それはただのこじつけに過ぎないのだから。

その言葉を待っていたばかりに、

リュヴリュはテーブルの上の本をもう一冊手に取った。

「世界の武器辞典」と書かれたその本のページをめくりながら、リュヴリュは話す。

「それを見つけるのが大変だったんですよ。確かに、今のままだとこじつけに過ぎない。でも、シンさんが持っていた剣が独特だったので、もしかしてと思って調べてみたんです」

リュヴリュは目的のページを見つけ、シンにそれを見せた。

「シンさんが持っているその剣。正確にはカタナって言うらしいんですけど、実はさっき言った島国だけで作られていたものなんですよ。ちなみにメイキョウスイって言うのは、心がきれいに澄み切った様子を意味するそうです」

あまりの事に、シンは言葉を失った。今まで自分を縛りつけていたシンという名前。

それに、まさかそんな意味があつたなんて。

「あなたは罪なんかじゃない。相手を思いやる心を持った優しい人です」

リュヴリュは力強く、そして優しくほほ笑み、シンを優しく抱きしめた。

リュヴリュの温もりがシンを優しく包み込む。

まるで、自分の全てを肯定してくれているような、

今までシンが受けてきた傷や、

苦しみを洗い流すような温かさ。

なぜか、目の前がまるで水面の様に揺れた。

それが一体なんなのか、なぜそうなったのか、シンは理解できなかった。

シンは、なぜかとめどなくあふれる涙を止める事が出来なかった。

シンはリュヴリュの胸の中で、

まるで、小さな子供のように嗚咽をあげながら号泣した。

最終章：太陽のはなびら

シンは森の中を歩いていた。

まだ空は曇ったままだけれど、小振りだった雨も止んでいた。

シンが一つ大きな伸びをすると、肩にとまっていたヒューイが語りかける。

「これで本当に良かったのですか？」

その問いに、シンは少し困ったような、しかし嬉しそうな表情を浮かべる。

「ああ、多分これも一つの道なのかもしれない」

シンは振り返って通ってきた道を見る。

不思議なものだ。

今までの十年もの間、自分を縛りつけていたものが、偶然立ち寄った家の、一人の少女に出会ったことで、いとも簡単に解きほぐされてしまった。

「まあ、私は一つ将来の不安が解消されて安心しましたよ」

「どういうことだい？ ヒューイ」

その答えをヒューイが言う前に、その答えがシンを追いかけて来た。

「お待ちせしました」

はち切れそうなバッグを持った、リュヴリュだった。

リュヴリュはシンの名前の本当の意味を言った後、自分はシンについていくといい張った。

シンは当然反対したが、絶対についていくと言ってきかなかった。自分と一緒にいると不幸になるとシンが言っても、

リュヴリュは幸せか不幸は自分で決めるものだと言張。

人並み以上に苦勞するとシンが脅しても、

苦勞する事は必ずしも不幸ではないといい張る。

何を言っても聞かなそうなので、

シンは特定の人と一年以上一緒にいると、響覚がコントロールできなくなってしまうから、

一緒に旅はできないと説明した。

しかし、それに対してリュヴリュは笑ってこう言った。

「大丈夫です。私は人ではないですから」

リュヴリュは今まで被っていた大きな耳あて帽子を取った。

シンは自分の目を疑った。

驚いたのは鮮やかな栗色の美しさだけではない。

リュヴリュの側頭部には、まるで犬のような耳がついていたのだ。

「先生は人に見せてはいけないうて言われていたんですけどね。シンになら見せても大丈夫でしょう」

笑顔でリュヴリュは言う。ここで、シンはある事に気がついて愕然とした。

リュヴリュとしゃべった後、客間に入った後、シンは普通にヒューイと話をしていた。

ヒューイとは響覚を使わなければ話す事が出来ない。

つまり、シンはリュヴリュと初めて出会ったときから響覚を使い続けていたのだ。

ということとは、リュヴリュは思ったことしか口にしていなかったということ。

つまり、響覚があるうと無かるうと、リュヴリュにはまったく関係の無いことで、

一緒にいることの障害にはならないのだ。

そしてシンは、観念してリュヴリュが自分と同行することを認めたというわけだ。

「全く、じつと見つめちゃって。随分といかれてしまっていますね」

ヒューイのからかうような口調に、ふとシンはわれに返り、顔を赤らめる。

「それじゃ。私は少し羽を伸ばしてきますね。お二人はごゆっくりどうぞ」

ヒューイはその大きな翼を広げ、大空に飛び立つのをシンは見つめていると、

「ヒューイさんと何をしゃべっていたんですか？」

リュヴリュが問いかける。当然言えるような内容ではないので、適当にその場はお茶を濁した。

「さて、準備も整ったね」

「はい、それじゃあ行きましょうか」

ふと、二人は空を見上げると。ちょうど曇り空から太陽が覗いていた。

いくつかの雲の切れ間から、太陽の光が地上に向かって差し込んでいる。

そのあまりの神々しさ、美しさに二人は感嘆の声を上げた。

リュヴリユはその太陽を見て、一輪の花が咲いているみたいだと微笑みながら言う。

シンはふと、母親が教えてくれた「光の花」を思い出す。

どんなに落ち込んでいて、悲しくて、寂しくても、それがずっと続くことは無い。

明けない夜が無いように、目を開いていれば、希望は太陽のように顔を出す。

どんなにつらいことがあっても、いつかはそれを笑って話せる日が来る。

シンの長い夜は、彼を苦しめた長い夜は、今ようやく明けたのだ。

雲間から差し込む太陽の光が二人を包み込む。

それは、まるでなびらのようだった。

—おしまい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6728k/>

太陽のはなびら

2010年10月13日16時28分発行